



「医療が必要」といわれても、 「織音」の仲間と離れることがつらかった。

共生型福祉施設 織音（旧事業所名 ころろ・さをり）

- ◎利用者：尚子さん（女性／当時38歳・機能障害による両上肢体幹不自由）
- ◎職員：熊井さん（会話の補助としてお話に参加していただきました）



— さをり織りの糸 —



— 利用者の尚子さん —

3.11
当日

避難所を経て病院に移動。
停電や仲間との別れが不安の
要因となる。

「織音」で織物の作業時間中に地震に見舞われた尚子さん。作業部屋の外の階段にさしかかったところで大きな揺れに遭遇しました。タイミングよく、同じ建物で勤めている女性がそばにいてくれたため、揺れが収まるまで階段から転落せずにやり過ごすことができました。

尚子さんが最初に不安になったのは、停電のため痰吸引器の電池がきれて、苦しくなるかもしれないということでした。津波の襲来が収まった後、不安を抱えながら近所の湊小学校に避難。「織音」の職員は、尚子さんには医療が必要だと考え、すぐに病院に搬送してもらえよう避難所の方に打診しました。しかし実際は、避難所で2日間待機することになったのです。避難所では准看護師や看護学校の学生、ヘルパーさんの手を借りながら過ごし、その後自衛隊の搬送によって石巻赤十字病院に移動することになりました。

実はこの時、尚子さんは病院に行きたくなかった、と話しています。「織音」の仲間と分かれて、一人だけ離れて病院で暮らさなければならないことに抵抗を感じた、というのです。尚子さんにとって「織音」や仲間の存在は、それほどかけがえのないものでした。

「織音」ではこの時のことを教訓に、災害などが起きた時でも、なるべくみんなが一緒にいられるような体制や設備を整えるようになりました。施設の中に自家発電設備を設置したので、再び停電にあっても、尚子さんが痰の吸引を心配することはなくなったのです。

地域
連携

ご近所さんが尚子さんの無事
を確認。普段の地域交流が連
携の一助に。

「織音」と自宅が離れているため、同居の家族が尚子さんの様子を見に行くことは困難でした。しかし、尚子さんの家族が仲良くしているご近所さんが自転車で「織音」に向かってくれました。向かう途中で、偶然会った職員を通して尚子さんの無事を知り、家族に伝えることができたのです。

実は尚子さんの家は地域に根ざして暮らしていて、普段から近隣との交流も盛んでした。そのため、ご近所さんがお父さんとお母さんの気持ちを汲んで、足を運んでくれたのです。普段からの地域交流が、災害時の連携におおいに役立ちました。

今後は

震災での経験が成長を後押し。
今後は自立に向かっていく
予定。

「織音」に来る前は外に出るのを嫌がり、人との関わりを避けてきたという尚子さん。しかし震災を経験して、尚子さんは大きく成長したといいます。尚子さんの震災体験を聞きに、さまざまな方がインタビューに訪れました。写真を撮られることも平気になりました。人との関わりが強くなることが、前ほど嫌ではなくなりました。

尚子さんの成長を見て、熊井さんは自立を後押ししたいと考えています。今後はショートステイなどを経て、自立に向かう予定です。